

【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私のもとにはときどき、学生から「京都大学に入りたいと思っていますので、話を聞きに行ってもいいですか？」とメールが来ることがあります。でも、実際に会って話してみると、なかには「ところで、山極先生はどんな研究をしているんですか？」と聞いてくる学生もいる。いくつもの大学を回っているのかもしれませんが、会って何を話そうか？ ということを自分の中で整理する時間を事前につくっていないのでしょうか。会う機会は自分からつくった。でも、相手と会ったら何が起こるのか、あるいはそれが自分にとってどういう意味を持つのかということまで考えていない、ということだと思います。

メールは単なる挨拶で、しかも要件だけを伝えるコミュニケーションツールです。相手とのタイムラグもあります。

一方、①対話は相手との間で同時発話的に進みますから、その過程で何が起こるか分かりません。可能性は無限にある。相手から問い返されたら、そのたびに②テキカクな答えを用意しないといけませんし、自分の考えが変わることがあるかもしれない。ところが、対話の内容そのものも、メールのように要点だけを聞いたり話したりすればいいという感覚の人もいるようです。

要点というのは「意味」です。でも、実際に必要なのはお互いを知り合う時間と、可能性。私たちは「こいつは口ではこんなことを言っているけど、本当は違うことをしたいんだろうなあ」などということも おもんばかり 慮りながら、あえて言葉には出さずに対話をしています。メール的な対話では、相手のそういう気配を読み取ったり、利用したりする社交技術のようなものが完全に抜け落ちてしまいます。つまり、言葉の一つひとつから伝わる意味だけを、非常に狭く、やり取りすることになるんですね。

たしかに人間が獲得した言葉という道具は、意味を伝えるには非常に有効な方法ですが、相手の気持ちや人格を判断するには不十分だったのでしょうか。

言葉は人間が最後に手にしたコミュニケーションのツールで、しかも登場したのはせいぜい数万年前ですから、人類の七〇〇万年の進化史から考えると、極めて最近に当たります。きっと人間はまだ言葉という道具を使いこなせていないのでしょうか。言葉だけで相手を評価したり、人格を理解することができない。それどころか、言葉を使って自分をあますところなく表現することだってできないのですから。

だからこそフェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションはなくてはならなかった。とりわけ相手の目の表情をきちんと読むために、対

面の時間を長く取る必要があったと考えられます。

人間にとって言葉が先か、対面が先かは、まだ明らかになってはいませんが、たぶん対面が先だろうというのが私の考えです。

もし言葉が意味だけを伝えるものだとしたら、われわれは会話をするときに対面する必要はありません。背中合わせに話してもいいし、お互いに明後日の方向を向きながら話しても問題はないはず。今は携帯電話ができたために、対面せずとも話せる場面が増えてはいますが、しかし⑩シユウシヨクの面接や商談のような重要な場面では、やっぱり私たちは直接会って相手の顔を見ながら話をします。

人間は言葉でいろいろな刺激を与えながら、相手の表情や目の動きを読み、相手の気持ち——どういうときに相手が昂るのか、どういうときに怒るのか、どういうときに優しい気持ちを抱くのか、ということ判断してきたのでしよう。

ですから、本来、②会話は対面のためにあった。もしくは、対面と相補的な関係にあったと言えるのかもしれない。

おそらく人間は対面的な交渉を非常に重視したために、それを長引かせたり、アクセサリーや調度で飾ったりしながら、コミュニケーションをつくり上げてきたのではないのでしょうか。

たとえば、お見合いの席には壁に絵が飾ってあったり、床の間には四季折々の生け花や掛け軸のようないろいろな調度があります。そして、お決まりのように外には庭園がある。何もない空間に二人で座らせたらしんどいからです。それが場の設えしつゑというもの。初対面の人と相対すれば、緊張して会話が弾まないことも少なくありません。それがお見合いの場ならなおさらです。そんなときに「お花、きれいですね」などと、話の「一」を切らせてもらえるようなものがあつたり、壁に掛かる絵を見て最近訪れた美術展の話をするというように、話のヒントになるようなものが鑿ちりばめられている調度品に助けってもらえる。

人間はサルと同様、視覚が優位な動物です。気になる情報が耳に入れば、実際に自分の目で見ないと気が済みません。「火事だ！」という声が聞こえれば、現場に駆けつける(四)野次馬のしやまがいる。恋人が浮気をしているという情報を友人から聞いたとしても、現場を押さえないことには、どこか半信半疑だし、スリは現行犯しかあり得ないように、見なければ証明できないことも多い。われわれが帰るところはやはり視覚的な情報なのです。人間にとって「見る」ということが真実を知ることですから、対話の際にも、言葉のような音声の他に、視覚に映るさまざまな「構え」が必要なのです。

③対話の基本は、実は構えだと私は思っています。深刻な話をされている最中に、足を組み、ふんぞり返って聞いている人は滅多にいません

ん。膝を揃えて畏まって座れば、その態度は時に言葉以上に相手から評価されることをみんな知っているからです。

他にも、言葉以外の情報から受け取るものといえ、「品格」が挙げられるでしょうか。

野生のゴリラを見るなかで私を感じたのは、ゴリラのドラミングが歌舞伎の見得とそっくりだということです。彼らは一步も引かない、という構えをする。相手に対して頑と自己主張をし、相手と◎対峙しようという態度。しかも、興味深いことに、ドラミングは相手への攻撃に必ずしも繋がるわけではありません。きちんと相手との間にバッファ（緩衝装置）を設けている。とくに（注1）シルバーバックの構えにはほれぼれするような品格を感じます。

たとえばオオカミが牙を剥き出して迫ってくる様子は獐猛だとは思っても、品格を感じることはありません。ゴリラのように相手との間にきちんと距離を置く。そして相手の出方を待つ。そういう抑制力と許容力から醸し出される余裕に、われわれは品格や美を感じるのではないのでしょうか。

歌舞伎の舞台を考えてみてください。たった一人で見得を切ってもしようがない。観客がいて、舞台上にも自分に注目している別の役者がいる。そういうなかで見得を切るあの姿がひとときわ際立って見える。周囲の態度が一体となっているからです。しかも、拍子木に似た柝で板を打つツケが調子良く「バタバタ」と打たれて場が最高潮を迎える。観客席からは「松島屋！」と声が掛かったりもする。

ゴリラの場合も周りに誰もいないところで単にドラミングをしても、さほど①イゲン（イゲンは感じられないでしょう。彼らがドラミングをするときは、だいたい周りのメスや子どもたちを意識しています。自分に注目が集まっているのも彼らは知っている。そのなかでドラミングをして目立つという行為が、周りを唸らせるような美しさを感じさせるのかもしれませんが。そのためには（目）泰然自若としていないといけないわけです。

泰然自若とは、自分だけでできるものではなくて、人がそう感じてくれるからこそ、泰然自若たり得る。自分は泰然自若としているつもりでも、単なるのんびり屋に見えたり、何も考えていないかのようにアホに見えたりする可能性もある。つまり、④品格を感じさせるといっても、実は無言のコミュニケーションの一つというわけです。シルバーバックのように私も泰然自若としていたところですが、これがなかなか難しいんです。

（山極寿一『京大総長、ゴリラから生き方を学ぶ』より）

(注1) シルバーバック：ここでは背中に灰色の毛のある成熟したオスのゴリラのこと。

問一 波線部㊸㊹について、カタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 空欄「」に入る語として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア くちび イ たんか ウ せき エ せんとう

問三 二重傍線部(㊺)「野次馬」(㊻)「泰然自若」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ㊺「野次馬」 ア はやしたてる人 イ 教養のない人

- ウ 興味本位で騒ぐ人 エ お節介な人

- ㊻「泰然自若」 ア 何のわだかまりもなく心穏やかなこと イ どんな事にも動じず落ち着いていること

- ウ 焦らずゆったりとした気持ちでいること エ 何事にも恐れずに堂々としていること

問四 傍線部①「対話」とあるが、筆者の考える「対話」の説明として当てはまらないものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 相手とコミュニケーションする中で、思わぬ発見や気づきがあること。

- イ 相手の表情を読み取りながら、本音を察してやり取りしていくこと。

- ウ 相手と会話を積み重ねるうちに、他者への理解が深まっていくこと。

- エ 相手の言葉自体に注目し、要点を効率よくとらえようとする事。

問五 傍線部②「会話は対面のためであった」とあるが、どういうことか。六十字以内で答えなさい。

問六 傍線部③「対話の基本は、実は構えだと私は思っています」とあるが、筆者がそのように考えるのはなぜか。本文中の言葉を使って、五十五字以内で答えなさい。

問七 傍線部④とあるが、「品格を感じさせる」ことが「無言のコミュニケーションの一つ」であるといえるのはなぜか。五十字以内で答えなさい。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「夢の田舎暮らし」を求めて雪乃の父親が突然会社を辞めた。いじめにあい登校できなくなった小学五年生の雪乃は、父親とともに曾祖母が住む長野で暮らし始める。現在も雪乃は登校できず、父親の経営する納屋カフェで手伝いをしている。胸いっぱい苦しさを抱えていても、雪乃は思いを吐き出すことができない。そのような折、自治会の役員をしている正治さんに声をかけられる。

「どした。おい」

声をかけられ、雪乃ははっと目をあげた。正治さんが(一)怪訝けげんそうに見ている。

「急に黙っちゃまって。舌でもなくしただけかい。ちっと座んな」

物言いは@ランボウだが、その顔は、心配してくれているように見えなくもない。

雪乃は首を横に振った。

「だいじょうぶです」

直売所のほうを見やる。

A

「なあ、あんた」

さつきから、あんたとかお前さんとかおめえとか、色々に呼ばれる。

「雪乃です」

「あ？」

「名前。雪乃です」

「ああ、そうかい。で、あんた、ガツコの勉強は好きでねえだかい」

「そんなことないですけど」

① 思わずむつとなつて、雪乃は言った。

「勉強なら、家でしてるし」

「どやってえ」

「お母さんが来た時に見てくれるし、詩織ちゃんとかと一緒に宿題の問題解いたり」

ふうん、と正治さんは鼻を鳴らした。

「なんちゅうか、㊦呑気なもんだない。俺らの頃は、勉強するつつたら、まつと必死だっただわ。ガツコへ行かせてもらえるってだけで御の字だったに」

「そんな……」雪乃は口ごもった。「そんなこと、あたしに言われても」

「だれえ、俺はあんたと喋しゃべってるだわ。あんた以外に誰に言うだ」

そうだけど、と雪乃は思った。

なるほど昔は、みんながみんな学校へ行けるわけじゃなかった。そのことはヨシ江から聞かされて知っている。今の時代に生まれてきた自分たちは、それに比べれば幸せなんだろう。でも、恵まれているからといって悩みがないわけじゃない。こちらにだっていろんな事情があるのに……。

一方的に責められているようで、②胸の奥がひりひり引き攣^つれて疼^{うず}く。火傷でもしたみたいだ。

「あとう、お話の途中にすみません」

はっと顔をあげると、

B

手には袋詰めのお菓子。いつも直売所に並べているお③テセイ^{てせい}のクッキーだ。

「甘いもの、お嫌いじゃないですか？ よかったら味見してみて頂けたらと思って」

ちよっと面食らった様子で首を引き、正治さんが美由紀をじろじろと見る。

「あ、これ、私が焼いたんです。けっこう人気あるんですよ」

雪乃は急いで棚から器を一枚取り出し、カウンター越しに差し出した。ありがと、と受け取った美由紀が、クッキーをざっくりそここにあける。

勧められた正治さんは、ふん、と鼻を鳴らしながらも思いのほか④スナオ^{すなお}に一つつまんだ。やがて、口をもごもごさせ⑤()^ながら言った。

「入れ歯の間に⑥ハサ^はまっておえねえわい」

「あら、すみません。お味のほうは？」

「ふん。悪くねえ」

C

雪乃もほっとして、グラスに注いだ水を差し出した。

「このクッキーは、卵や牛乳を一切使わずに作ったんです」

「へえ？ 何だってまた」

「アレルギーがある人にも安心して食べてもらいたくて。うちの娘が、かなり重いアレルギー体質なんですよ。卵や牛乳がわずかでも口に入っただけで、」

「蕁麻疹^{じんましん}か何か出るのかい」

「呼吸困難で命にかかわるものですから」

正治さんが⑦()^なったのがわかった。

D

「うちの義父や義母なんかは、決して悪気はないんですけど、アレルギーのことを軽く考えてしまうところがあって、『少しずつ食べて慣ら

『していけば治るだわ』なんて怖ろしいことを言うし、説明しようとしても、『昔はそんなことなかったにねえ』ってため息つかれて終わっちゃうし。……あ、ごめんなさい、なんだか愚痴みたいに聞こえますね」

「いや。別にかまわねえけども」

「ただね、うちの子だけじゃないですよ。日本中、いえ、世界中でアレルギー体質の人はものすごく増えて、環境や食生活の変化がそうさせてるわけだから、たしかに昔とは事情が違っているんです。みんながふつうに食べてる卵や牛乳で死ぬほど苦しい思いをするのは、あの子のせいでもなければ、産んだ私のせいでもない……はずなんですけど……頭でわかってるんですけど、どうしてでしょうね。自分にはどうにもしようのないことを、人生の大先輩から『昔はそんなことなかったのに』って言われてしまうと、なんだか責められているような気持ちになっちゃうんですね」

その横顔を、途中から雪乃は息を殺して見つめていた。わかってもらえているのだという安堵と、こんなかたちで庇かばってもらうことの申し訳なさが交叉こうさする。

美由紀の言わんとするところは、聞いていた正治さんにも伝わったのだろう。苦い顔になって雪乃のほうを見る。雪乃が目とお腹に力を入れて見つめ返すと、正治さんはまた美由紀へ視線を戻した。

とうとう、ため息をついて言った。

「やれやれ、わかったわかった。俺が悪かっただわ」

怒り出すんじゃないかと思つて身構えていた雪乃の肩からも、ふっと力が抜ける。えらそうだけれど、この人を少し見直すような気持ちになつた。

「しかしまああんたも、持つて回つたつうか、ずねえ物言いをするだなあ。この子と喋つた話、黙つて聞いてただかい」

「たまたま聞こえてきただけです」と美由紀が笑う。「雪乃ちゃん、『ずない』ってわかる？」

「うん。意地が悪い、みたいな意味でしょ」

「おいおい。今のは、まあ何ていうだか、半分は褒ほめたみてえなもんだわ」

「ありがとうございます。長男の嫁は、ずねえくらいでないと務まりませんから」

正治さんはあきれたように苦笑すると、クッキーをもうひとつ口に入れ、噛んでいるうちにまた入れ歯にはさまったのだろう、顔中を動かすようにしてようやく始末をつけてから、雪乃を見た。

「さつきはよけいなことまで言っちゃったけども、俺が言いたかったのは、要するに、あれだ。あんたは幸せもんだ、ちゅうことだわ」

「それは……はい」

「昔と比べて言ってるんじゃないやねえよう。今こん時、どんだけの人間があんたのことをかんげえてるかってことだ。おふくろさんもおやじさんも、俺らに頭下げなすつたに。あすこまで言われっちゃあ、ほー、こつちもまるつと承知するしかねえによ」

あんただけじゃねえんだよう、と、もそもそ続ける。

「俺にやあ小難しいことまではわかんねえけども、それつくれえのことはわかるだわ。誰だって、そりやあ人間だもの、てつくりけえつちまうことはあるに。けどな」

言葉を切り、正治さんは雪乃の目を覗き込んだ。

「起き上がり小法師とおんなじだ。てつくりけえつたら、ほー、何べんだって起き上がんねえと」

夕方、家まで送り届けてくれた美由紀は、いつもと同じくにっこり笑って手を振っただけで帰っていった。今日のことは気にしないように、とか言われるかと思っただが、それもなかった。③言おうが言うまいが、どうせ考えてしまおうとわかっていたからかもしれない。

(村山由佳『雪のなまえ』より)

問一 傍線部(一)「怪訝そうに」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 気の毒そうに
イ 悲しそうに
ウ 心配そうに
エ 不思議そうに

問二 波線部㉮㉿について、カタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問三 空欄 A ～ D に入る最も適当な言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア よかった、と美由紀がにっこりする。
- イ 美由紀が正治さんのそばに立っていた。
- ウ 失礼しますね、と美由紀がカウンターの並びの席に腰掛ける。
- エ 美由紀はやはりまだこちらに背を向けて、お客さんと話している。

問四 傍線部①「思わずむっとなつて」とあるが、どうしてむっとなつたのか。六十字以内で答えなさい。

問五 傍線部②「胸の奥がひりひり引き攣^つれて疼^{うず}く」とあるが、なぜそのように感じるのか。七十字程度で答えなさい。

問六 二重傍線部(ロ)「ながら」と同じ用法のものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 子どもでありながらに鋭い。
- イ 本を読みながら食事をとる。
- ウ 洋服ながらプールにつかる。
- エ 狭いながらも居心地が良い。
- オ 昔ながらの伝統的な酒造り。

問七 空欄 ㊦ に入る言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ほろりと
- イ ぴたつと
- ウ ぎよつと
- エ にやりと

問八 傍線部③「言おうが言うまいが、どうせ考えてしまう」とあるが、これはどういふことを考えてしまうといっているのか。正治さんの会話の内容を踏まえて五十文字以内で答えなさい。

【三】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〔注1〕堀河院の御時、〔注2〕勘解由次官明宗とて、いみじき笛吹きありけり。①ゆゆしき心おくれの人なり。院、笛聞こしめされむとて、召したりける時、帝の御前と思ふに、②臆して、わななきて、え吹かざりけり。

〔注3〕本意なしとて、相知れりける女房に仰せられて、③私に〔注4〕坪の辺りに呼びて、吹かせよ。われ、立ち聞かむ」と仰せありければ、月の夜、かたらひ契りて、④吹かせけり。「⑤女房の聞く」と思ふに、はばかりかたなくて思ふさまに吹きける。世にたぐひなく、めでたかりけり。

帝、感に堪へさせ給はず、「日ごろ、上手とは聞こしめしつれども、⑥かくほどまでは思しめさず。いとどこそめでたけれ」と仰せ出されたるに、「さは、帝の聞こしめしけるよ」と、たちまちに臆して、さわぎけるほどに、⑦縁より落ちにけり。

〔十訓抄〕より

〔注1〕堀河院：第七十三代天皇。後に出てくる「院」「帝」も同じ人物

〔注2〕勘解由次官：国司交替の審査に当たる役所の副官

〔注3〕本意なしとて：残念に思われて

〔注4〕坪の辺り：建物・塀などに囲まれた狭い庭の近く

〔注5〕縁：家の外側にそなえた細長い板敷き

問一 波線部④「女房の聞く」の「の」と同じ用法のものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 僕の自転車は古いが、兄のは新品だ。

イ 黄色い絵の具のうすいのを塗るといいね。

ウ 花の香りがする。

エ ピカソの描いた絵は傑作だ。

問二 傍線部①「ゆゆしき心おくれの人なり」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ひどく心が劣った人である

イ 驚くほど小心な人である

ウ とても思いやりのある人である

エ たいそう感性豊かな人である

問三 傍線部②「臆して、わななきて、え吹かざりけり」と対照的な様子を描いている部分を抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問四 傍線部③「私に坪の辺りに呼びて、吹かせよ」とあるが、帝は何のためにこのような指示をしたのか。三十字以内で答えなさい。

問五 傍線部④「吹かせけり」の主語を本文中から抜き出して答えなさい。

問六 傍線部⑤「かくほどまでは」とは「これほどまでは」の意味であるが、「これほど」の指す内容を、本文中より十五字程度で抜き出して答えなさい。

問七 傍線部⑥「縁より落ちにけり」とあるが、なぜこうなったのか。五十字以内で答えなさい。

受験番号

名前

| 一 | | | | |
|----|----|----|----|----------|
| 問七 | 問六 | 問五 | 問二 | 問一 |
| Ⓐ | Ⓑ | Ⓒ | Ⓓ | Ⓐ |
| | | | | 問三 II |
| | | | | Ⓑ |
| | | | | III |
| | | | | 問四 |
| | | | | Ⓒ |
| | | | | Ⓓ |
| | | | | Ⓔ |
| | | | | Ⓕ |
| | | | | Ⓖ |

| 二 | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|
| 問八 | 問六 | 問五 | 問四 | 問三 | 問二 |
| Ⓐ | Ⓑ | Ⓒ | Ⓓ | Ⓔ | A |
| | | | | | B |
| | | | | | C |
| | | | | | Ⓑ |
| | | | | | D |
| | | | | | Ⓒ |
| | | | | | Ⓓ |
| | | | | | Ⓔ |
| | | | | | Ⓕ |
| | | | | | Ⓖ |

| 三 | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|
| 問七 | 問六 | 問五 | 問四 | 問三 | 問一 |
| Ⓐ | Ⓑ | Ⓒ | Ⓓ | Ⓔ | 問二 |
| | | | | | Ⓑ |
| | | | | | Ⓒ |
| | | | | | Ⓓ |
| | | | | | Ⓔ |
| | | | | | Ⓕ |
| | | | | | Ⓖ |
| | | | | | Ⓗ |
| | | | | | Ⓖ |
| | | | | | Ⓗ |

| | |
|------|----|
| 受験番号 | 名前 |
|------|----|

| 一 | | | | | | | | | | |
|----|----|---|----|---|----|----|---|---|------|-------|
| 問七 | 問六 | | 問五 | | 問二 | 問一 | | | | |
| こ | と | 自 | に | る | 人 | ち | 、 | 会 | 問二 | 問一 |
| と | を | 分 | 相 | こ | 間 | を | 相 | 話 | ア | ① 的確 |
| だ | 品 | が | 手 | と | に | 判 | 手 | は | 問三 | ② 就職 |
| か | 格 | 周 | か | で | と | 断 | の | 、 | IIウ | |
| ら | が | り | ら | あ | つ | す | 表 | 対 | ② | ③ たいじ |
| 。 | あ | の | 評 | る | て | る | 情 | 面 | IIIイ | |
| ⑦ | る | 視 | 価 | か | 一 | の | や | の | ② | ④ 威厳 |
| | と | 線 | さ | ら | 見 | に | 目 | 際 | 問四 | |
| | 感 | を | れ | 、 | る | 必 | の | に | エ | ⑤ |
| | じ | 意 | る | 対 | 一 | 要 | 動 | 言 | ⑤ | |
| て | 識 | た | 話 | と | で | き | 葉 | で | | ②×4 |
| く | し | め | で | い | あ | を | で | | | |
| れ | 、 | 。 | の | う | つ | 読 | 刺 | | | ① 素直 |
| て | 他 | | 態 | こ | た | み | 激 | | | |
| 初 | 者 | | 度 | と | と | 、 | を | | | ⑦ |
| め | が | ⑦ | が | が | い | 相 | 与 | | | |
| て | 自 | | 言 | 真 | う | 手 | え | | | ②×5 |
| で | 分 | | 葉 | 実 | こ | の | な | | | |
| き | の | | 以 | を | と | 気 | が | | | ②×5 |
| る | こ | | 上 | 知 | 。 | 持 | ら | | | |

| 二 | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|---|----|---|----|----|----|----|--------|
| 問八 | 問七 | 問六 | 問五 | | 問四 | | 問三 | 問二 | 問一 | | |
| と | に | 自 | い | い | の | 自 | が | さ | 名 | Aエ | ① 乱暴 |
| い | 行 | 分 | る | こ | に | 分 | 嫌 | れ | 前 | | ③ |
| う | け | の | よ | と | 、 | に | い | た | を | Bイ | |
| こ | な | こ | う | だ | 昔 | も | だ | だ | 名 | Cア | ② のんき |
| と | い | と | な | つ | は | 色 | か | け | 乗 | Dウ | ④ (完解) |
| 。 | 現 | を | 気 | た | 行 | 々 | ら | で | つ | | |
| ⑤ | 実 | 思 | が | と | か | な | だ | な | て | | ⑥ |
| | か | っ | し | 言 | せ | 事 | と | く | い | | |
| | ら | て | た | わ | て | 情 | 決 | 、 | る | | ⑦ |
| | ど | く | か | れ | も | が | め | 学 | の | | |
| | う | れ | ら | 、 | ら | あ | っ | 校 | に | | ⑧ |
| | や | る | 。 | 一 | え | っ | け | に | い | | |
| | っ | 人 | ⑧ | 方 | る | て | ら | 行 | い | | ⑨ |
| | て | 々 | | 的 | だ | 学 | れ | か | 加 | | |
| | 立 | の | | に | け | 校 | た | な | 減 | | ⑩ |
| | ち | こ | | 責 | で | へ | か | い | な | | |
| | 上 | と | | め | あ | 行 | ら | の | 呼 | | ⑪ |
| | が | や | | ら | り | け | 。 | は | び | | |
| | る | 学 | | れ | が | な | ⑩ | 勉 | 方 | | ⑫ |
| | か | 校 | | て | た | い | | 強 | を | | |

問八(別解)
(47字)
自分のことを思ってくれている人がたくさんいるのに、学校に行けないままでいいのかということ。

| 三 | | | | | |
|----|----|----|----|-------|----|
| 問七 | 問六 | 問五 | 問四 | 問三 | 問一 |
| て | が | 帝 | 世 | は | エ |
| あ | 立 | が | に | ば | ② |
| わ | ち | 思 | た | か | 問一 |
| て | 聞 | わ | ぐ | る | イ |
| た | き | ず | ひ | か | ② |
| か | し | 感 | な | く | |
| ら | て | 動 | く | に | |
| 。 | い | の | 、 | 吹 | |
| ⑥ | た | 声 | め | き | |
| | こ | を | で | ける(。) | |
| | と | 上 | た | る② | |
| | に | げ | か | よ | |
| | 気 | た | り | う | |
| | づ | た | け | に | |
| | き | め | り | し | |
| | 、 | 、 | 。 | て | |
| | 急 | 明 | ② | こ | |
| | に | 宗 | | っ | |
| | 臆 | は | | | |
| | し | 帝 | | | |